

鶴つる

天駆け、稲穂をばこい

鶴は、その優美なたたずまいや天駆けの姿から、瑞鳥すいちょうとして親しまれてきました。なかでも丹頂鶴タンチョウコは真つ白な体と日輪にちりんのような赤い頭頂部が好まれ、多くの絵画や工芸で吉祥のモチーフとなっています。鶴は千年の命を持つといわれ、長寿の象徴ともされてきました。また、鶴は穀霊神としての側面もあり、鶴がくわえてきた稲穂から稲作が始まったとする伝承は日本各地にみられます。伊勢神宮の別宮である伊雑宮いざわのみやで行われる「御田植式みきたうせしき」はその伝承を基にした神事で、白い着物に赤いたすきがけをした早乙女さくまづめたちの姿は、まさに鶴そのものです。このように稲との繋がりもある「鶴」は、しめかざりのモチーフにもなりました。

不思議なことに、鶴のしめかざりは九州地方に多くみられます。他の地方にもありますが、その数やバリエーションの多さは圧倒的に九州です。いまでも鹿児島県出水市は鶴の越冬地として有名ですが、それがしめかざりのかたちに関係しているのかはわかりません。鶴のかたちは戦後に生まれたとも言われます。歴史的には新しい造形なのかもしれませんが、だからこそ鶴のしめかざりには自由と多様性を見て取ることができるのだと思います。

大分県由布市

108.0cm×90.0cm

丁寧に始末された藁しべで翼を表現し、鶴の首の下には総角結びが付いている。総角結びの結び目を見ると「入」の字形になっており、福徳を招き入れる意味がある。



Crane

Legends from all over Japan tell of how rice farming started with a crane that came flying with an ear of rice in its beak. The crane in this shimekazari from Yufu, Oita pref., spreads its wings widely, and the string under its neck is tied to form the character for “enter” – inviting fortune and prosperity.